

# INFLUENZA QUESTION & ANSWER

## 2018年に話題となった 「隠れインフルエンザ」について 教えてください。

廣津伸夫  
廣津医院院長

「隠れインフルエンザ」とは、思いもよらず「インフルエンザ」と診断された、症状がきわめて乏しいインフルエンザを意味するようで、マスコミで、話題作りのための医師の造語によるものと聞き及んでいます。従来、インフルエンザは、呼吸器症状に頭痛、倦怠感などの全身症状が加わった発熱疾患とされてきましたが、迅速診断法が一般に使用されることにより、インフルエンザの中には、必ずしも、これらの症状のすべてに伴っていない非典型例もあることがわかってきています。このような場合、当然、患者さんにとっては、思いもよらぬ診断であることは想像されます。医師はこのようなインフルエンザを見落とさないよう丁寧な診療をしなければなりません、診断根拠もなく、患者さんに請われるまま検査を行った結果として、偶然インフルエンザが見つかるといったことは避けなければなりません。このような場合

に「隠れインフルエンザ」なる妙な言葉が出てくるのだと思います。本来、診断は明確な根拠をもってなされるべきと考えます。

インフルエンザと診断した自験例2,642例のうち、非典型例についての診断根拠について述べます(表1)。

37.5℃以上を有熱とした場合、初診時の無熱症例は3.9%でしたが、診断後にそのうちの33%が発熱し、全経過での無熱症例は2.4%でした。これらの症例は小児ではまれでしたが、全員、呼吸器症状と全身症状を認めています。有熱症例2,538例のうち、全身症状を欠いた症例は3.3%、呼吸器症状を欠いた症例は1.4%で、ともに小児に多い傾向にありました。以上、ほとんどの症例で発熱、呼吸器症状、全身症状のいずれか2症状を有していたので迅速診断法を用い確定診断いたしました。0.2%の無症状例がありますが、診断には、家族内感染者

表1 インフルエンザ感染症の臨床像における欠落症状の割合

		無熱症例の割合			有熱症例の症状別割合			
		症例数	初診時の無熱症例	全経過における無熱症例	全経過における有熱症例数	全く症状のない症例	呼吸器症状だけの症例	全身症状だけの症例
A/H3N2 (1,432人)	12歳以下	783	0.3%	0.3%	781	0.4%	5.2%	1.7%
	13~59歳	611	9.2%	6.1%	555	0.0%	1.1%	0.7%
	60歳以上	38	10.5%	7.9%	34	0.0%	0.0%	0.0%
A/H1N1 (400人)	12歳以下	205	1.5%	0.5%	202	0.0%	4.0%	2.0%
	13~59歳	168	7.7%	4.2%	155	0.6%	1.3%	0.0%
	60歳以上	27	7.4%	3.7%	25	0.0%	0.0%	0.0%
Flu B (810人)	12歳以下	594	1.2%	0.3%	587	0.0%	4.3%	2.4%
	13~59歳	187	9.1%	5.3%	170	0.0%	1.2%	0.0%
	60歳以上	29	0.0%	0.0%	29	0.0%	0.0%	0.0%
計		2,642	3.9%	2.4%	2,538	0.2%	3.3%	1.4%

**Key Words** ▶ 隠れインフルエンザ 迅速診断法 診断根拠 家族内感染 不顕性感染